

主共にいます故

丸山 勉

[聖書] 創世記 39 章 1～12 節、19～23 節

ヨセフはエジプトに連れて来られた。ヨセフをエジプトへ連れて来たイシュマエル人の手から彼を買い取ったのは、ファラオの宮廷の役人で、侍従長のエジプト人ポティファルであった。主がヨセフと共におられたので、彼はうまく事を運んだ。彼はエジプト人の主人の家^にいた。主が共におられ、主が彼のすることをすべてうまく計られるのを見た主人は、ヨセフに目をかけて身近に仕えさせ、家の管理をゆだね、財産をすべて彼の手に任せた。主人が家の管理やすべての財産をヨセフに任せてから、主はヨセフのゆえにそのエジプト人の家を祝福された。主の祝福は、家の中にも農地にも、すべての財産に及んだ。主人は全財産をヨセフの手にゆだねてしまい、自分が食べるもの以外は全く気を遣わなかった。ヨセフは顔も美しく、体つきも優れていた。これらのことの後で、主人の妻はヨセフに目を注ぎながら言った。「わたしの床に入りなさい。」しかし、ヨセフは拒んで、主人の妻に言った。「ご存じのように、御主人はわたしを側に置き、家の中のことには一切気をお遣いになりません。財産もすべてわたしの手にゆだねていただきました。この家では、わたしの上に立つ者はいませんから、わたしの意のままにならないものもありません。ただ、あなたは別です。あなたは御主人の妻ですから。わたしは、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましょう。」彼女は毎日ヨセフに言い寄ったが、ヨセフは耳を貸さず、彼女の傍らに寝ることも、共にいることもしなかった。こうして、ある日、ヨセフが仕事をしようと家に入ると、家の者が一人も家の中にいなかったため、彼女はヨセフの着物をつかんで言った。「わたしの床に入りなさい。」ヨセフは着物を彼女の手に残し、逃げて外へ出た。(中略)

「あなたの奴隷がわたしにこんなことをしたのです」と訴える妻の言葉を聞いて、主人は怒り、ヨセフを捕らえて、王の囚人をつなぐ監獄に入れた。ヨセフはこうして、監獄にいた。しかし、主がヨセフと共におられ、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった。監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。主がヨセフと共におられ、ヨセフがすることを主がうまく計られたからである。

[序] エジプトに売られていったヨセフ

「ヨセフ物語」をご一緒に味わっています。今日は創世記の 39 章です。兄弟たちに捨てられ、売られた形になって、独り孤独に遠くエジプトの地に運ばれたヨセフです。37 章には 17 才であったとありますがけれども、この時も、まだそれからそれ程時が経っていない時だったと思います。少年の面影が残る若々しいヨセフです。

今日の 39 章で分かることは、彼が、言ってみれば不条理と思える環境・状況の中に置かれても、自分を失うことなく、凜とした態度で、誠実に生きていることではないでしょうか。これはヨセフが、もともと人間が出来ていたからでしょうか？ そうではないと思います。彼は、初めは、誰よりも父親ヤコブの愛情を一身に受けているという後ろ盾もあり、あまり他の兄弟たちの感情を顧みることのないままの言動があり、それが兄たちの反感を買っていた訳ですが、そのことにヨセフ自身は全く気が付かない、まあ、幼稚なところがあったと思います。

しかし、まるで王子様のようなヨセフは、兄たちの手によってエジプトの地に、奴隷のように売られてしまった訳です。アツと言う間の転落です。ここエジプトでは誰も彼を知る者はいません。不安や悲しみ、恐れもきっと感じたと思います。けれどもこの期間の中で、彼は、自分を振り返り、父ヤコブから聞いていた神様に個人的に祈り、嘆き、訴え、それこそ陶器師の手の中の器（陶器）のように、神様の手の中で“練られて”いったのではないのでしょうか？

[1] どうして「神に」罪を犯すことができましょう

そして今日のこの 39 章、ここには、自らが仕える侍従長ポティファルの、こともあろうに妻から性的関係を執拗に迫られるという誘惑にヨセフが負けなかったこと、しかし、濡れ衣を着せられ、結果ポティファルの怒りを買って、囚人をつなぐ監獄に入れられてしまったという話が記されています。

この 39 章の前半で、ヨセフの信仰の表明とも言うべき言葉が初めて出てきます。7 節の所からもう一度見てみましょう。

“これらのことの後で、主人の妻はヨセフに目を注ぎながら言った。「わたしの床に入りなさい。」しかし、ヨセフは拒んで、主人の妻に言った。「ご存じのように、御主人はわたしを側に置き、家の中のことには一切気をお遣いになりません。財産もすべてわたしの手にゆだねていただきました。この家では、わたしの上に立つ者はいませんから、わたしの意のままにならないものもありません。ただ、あなたは別です。あなたは御主人の妻ですから。わたしは、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましょう。”（創世記 39:7～9）

ここでヨセフは「どうして神に罪を犯すことができましょう」と語っています。彼はもうこの時既に、人生のすべての出来事を、「神様との関わり」の中で捉えているということです。ですから誘惑を受けた時、“ご主人様に” 罪を犯すことは出来ないと語っていませんし、そのようなことは“私の信念に則って” 出来ませんとも語っていないのです。ただ、「神様との関わり」です。「わたしは、どうしてそのように大きな悪を働いて、神に罪を犯すことができましょう」とヨセフは言った。これは彼の中に、

自分がただ神様によって恵まれ、今があるのだ、という深い思いが無ければ言えない言葉だと思います。ヨセフにとって、神様は死んだ神様ではなく、生きた神様なのです！

聖書がこれほどまで生々しく性の誘（いざな）いについて語っている箇所も珍しいと思います。新約聖書のヨハネによる福音書 8 章では、姦淫の場で捕えられた女性がイエス様の前に連れてこられ、このような女は律法では打ち殺せとなっているが、あなたはどうするのか、とイエス様が律法学者に問われている場面がありますが、ヨセフの話というのは、その誘惑の「現場」の話ですね。

この「性」の問題というのは、どうでしょうか、あまり語りたくない問題ですよ。普通に、これは恥ずかしい話ですし、極めてプライベートな話、隠されている話という側面があるからではないかと思えます。では、隠れている事だからどうでもよいのか？いいえ、聖書は——神様は——この性の問題を軽くは捉えません。**モーセの「十戒」**の中に「あなたは姦淫してはならない」という戒めがありますね。夫婦以外の性（セックス）を戒めている律法です（出エジプト 20 : 14）。この律法は、何の戒めに続いているかというのと、「あなたは殺してはならない」（同 20 : 13）という戒めに続いているのです。第六戒（人と人との間の関係の戒めの最初）が「殺してはならない」、第七戒が「姦淫してはならない」です。「姦淫」の問題というのは、「殺人」と並んでいるのです。

そんな大袈裟な、と私たちは思ってしまう所があるかもしれませんね。けれども神様はこれを、人間に対して大切な約束事としてお与えになりました。あなたが本当に神様に造られた人間として大切に生きていくため、いのちの尊厳が守られていくためには、「人を殺してはならない」ことと共に、「姦淫してはならない」ということを真剣に受け止める必要がある、と聖書は語っているように思います。

[2] 「性」のあり方—神様との関係で

人間にとって、私は、人間を揺さぶる三つの大きな誘惑があるように思います。一つは、名誉欲・支配欲（プライド）、もう一つは金銭・お金の欲望、そして性の欲望です。これらは人間も最も弱い部分、とも言えるのかもしれません。ですから人間を神様から引き離そうとするサタンは、これらをくすぐって誘惑するのではないのでしょうか？

カール・バルトという 20 世紀の著名な神学者は『キリスト教倫理Ⅱ』の中の「男と女」の項目の中で、こう語っています。

「この性のあり方でも、男と女が、この一対として、創造主の神に対して、自己を誉ある者とするか、恥ずべきものとするかが決まるのである。性の交わりは、肉体

的なことにとどまらない。これは、その人全体に関わるのである。つまり神の戒めの光のもとでは、性の問題は、それ自体独立的に閉鎖された事柄として見るのではなく、生活全体の中で、ここで一緒になる二人の人の全生活の関連の中で見られなければならない。すなわち、人と隣人と、汝と私と、男と女との関係としてである。神の戒めが呼びかけているのは、この、その人全体としての男と女である」と。

神様は人間をまるごと愛しておられます。性というのは、人間存在の大切な大切な要素です。ですから、その部分だけを切り離して、自分の欲望や相手の欲望のために使うということに対して神様は「ノー」とおっしゃるのです。「あなたはわたしのものなのだ、欲望に負かされて、欲望の奴隷になってはなりません」と。

ヨセフは、この時ハッキリとポティファルの妻に対して「ノー」と言いました。ヨセフが常に神様との関係の中で、自分というものを捉えていることが出来たからでしょう。

[3] 神様が主導権を取って下さる人生

しかし、そのことは、ポティファルの妻の怒りをもたらし、主人ポティファルに偽りを語り、ヨセフは監獄の中の人となってしまいました。聖書は書いていませんが、ヨセフはきっと「神様、この仕打ちは何故ですか？」と神様に問うたと思います。けれども彼は、それで神様を信じられないというのではなく、既に「**神様のプラン**」を信じる生き方に変えられていたのだと思えてなりません。刹那的（その場しのぎ）な生き方であったら、彼はこの女性の誘惑に負けていたかもしれません。でもそうではなかった！今、神様に従った故に、ヨセフは獄中に入られているのです。

しかしここで面白いと思うことは、聖書はことさらヨセフのことを立派だとか、信仰が篤いとか、そのようなことは書いてはいないのですね。ヨセフが主語ではなく、神様が主語でこの場面は描かれているのです。21 節以下をもう一度ご覧下さい。

「しかし、**主がヨセフと共におられ**、恵みを施し、監守長の目にかなうように導かれたので、監守長は監獄にいる囚人を皆、ヨセフの手にゆだね、獄中の人のすることはすべてヨセフが取りしきるようになった。監守長は、ヨセフの手にゆだねたことには、一切目を配らなくてもよかった。**主がヨセフと共におられ**、ヨセフがすることを**主が**うまく計らわれたからである。」

「主が」、「主が」という言葉です。これは 39 章の初めの方でも記されています。「**主がヨセフと共におられたので**」。私たちの信仰生活も、人生もそうなのだと思います。神様が主導権を取って下さいます！私たちは弱いのです。弱さを知る、ということは大事なことではないでしょうか。弱さを感じるから、神様が共にいて下さることが、骨身に染みて有り難い、感謝な事に思えるのではないのでしょうか。ヨセフ

も、監獄の中にあつて恵みを受け、囚人のことを全部任されるまでになったのです。これはすべて神様がして下さった「恵み」以外の何ものでもありません。ヨセフは、この監獄の中にありながらも、**神様の平安(シャローム)**の中に生きることが出来たのです。神様が「共におられる」からです。私たちも同じです。

[結] 「置かれた場所」で生きる

岡山にあるノートルダム清心女子大学の学長であった渡辺和子さん(カトリックのシスター)が書かれた『置かれた場所で咲きなさい』はミリオンセラーになりましたね。あの本の中で渡辺さんはご自分の辛かった時の事を語られています。36才の若さで三代目の学長に抜擢されたのですが、それまでは70才以上の外国人が学長でしたので、風当たりも強いものがあつたようです。そしてこのようにも言っておられます。

「初めての土地、思いがけない役職、未経験の事柄の連続、私はいつの間にか“**くれない族**”になっていました。「あいさつをしてくれない」、こんなに苦労しているのに「ねぎらってくれない」、「わかってくれない」。自信を喪失し、修道院を出ようかとまで思いつめた私に、一人の神父が言葉をかけて下さいました。

「置かれたところで咲きなさい」、と。そしてその後でこう語られました。「咲くということは、仕方がないと諦めることではありません。それは自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにすることによって、神があなたをここにお植えになつたのは間違いでなかったと証明することなのです」。…ちょうど今日のヨセフの話と重なるではないですか。5節の所にこうあります。

「**主人が家の管理やすべての財産をヨセフに任せてから、主はヨセフのゆえにそのエジプト人の家を祝福された。主の祝福は、家の中にも農地にも、すべての財産に及んだ。**」また、監獄に入ってから、その「置かれた場」の責任者・看守長がヨセフに信頼するようになったというのは、ヨセフの誠実さが、生き様が「証し」になつたということなのではないでしょうか。周りは皆異邦人です。

渡辺和子さんの話に戻りますと、渡辺さんはこうおっしゃっています。

「そうだ。置かれた場に不平不満を持ち、他人の出方で幸せになったり不幸せになつたりしては、私は**環境の奴隷**でしかない。人間と生まれたからには、どんな所に置かれても、**そこで環境の主人となり自分の花を咲かせよう**と決心することが出来ました。それは「**私が変わる**」ことによつてのみ可能でした。私は“くれない族”の自分と訣別しました。私から先に学生にあいさつし、ほほえみかけ、お礼をいう人になつたのです。そうしたら不思議なことに、教職員も学生も皆、明るくなり優しくなつてくれました」と。

そして、このようにも言われます。「どのような状況の中でも「咲く」努力をしてほしいのです。しかし人生には予期しない様々なことが起こる。どうしても咲け

ない時もあります。雨風が強い時、日照り続きで咲けない日、そんな時には無理に咲かなくてもいい。その代わりに、根を下へ下へと降ろして、根を張るのです。次に咲く花が、より大きく、美しいものとなるために」。

慰められます。咲けない時は、下に根を張りなさい、と。これは、じつと「待つ」ということでもあると思います。私たちは、教会もそうですが、私たち自身も**神様の畑**なのです。私たち自身の努力ではなく、水、光、風、それが育てます。そうです、**神様の聖霊の力**によって私たちは**絶えず新しくされていく**のです。ニコデモではありませんけれども、**新たに生まれさせて下さる**のです。そこには、年齢は関係ありません。神様の永遠に比べれば、私たちの90年、100年の人生を刷新して下さることなど簡単なことだと思えます。

最後に新約聖書の言葉を読んで終わりたいと思います。

ヨハネによる福音書 16 章 33 節。—「**あなたがたには世で苦難がある。しかし勇気を出しなさい。わたし(イエス)は、既に世に勝っている**」

もう一箇所は礼拝の招きの聖句で読んで頂いた言葉です。ヨハネの手紙一 5:4~5。—「**神から生まれた人は皆、世に打ち勝つからです。世に打ち勝つ勝利、それは私たちの信仰です。誰が世に打ち勝つのか。イエスが神の子と信じる者ではありませんか**」。

お祈り致します。